

評価・標準化研究会

会長 飯倉善和（弘前大学）

幹事 沖 一雄（東京大学）

1. 研究会の概要

本研究会は平成7年に発足しました。当初の設立趣意書にも予想されたように、リモートセンシングの技術自体は昨今の環境問題の深刻化と共に広く世に知られる様になり、その期待はますます大きくなってきています。また、コンピュータの性能の飛躍的向上や数値標高モデルや放射伝達モデルなどが手軽に使えるようになってきたこともあり、衛星画像処理の方法にも進展が見られています。

しかし、これらの成果はまだ確立したものとは言えず、既存の画像処理ソフトを利用している一般の利用者には良く知られていません。実利用を進展するためには、これらの手法の評価と標準化を行ない、それらを一般の利用者にお知らせし、リモートセンシングによって提供される情報の信頼性を向上させることが不可欠です。

本研究会では、各種の衛星画像処理手法の標準化や用語の統一を行なうとともに、誰もが自分の処理手法を評価できる標準データセットの充実や評価方法の統一化・標準化に関する会員の研究を支援していきたいと考えています。

2. 最近の活動実績

我が国のような山が多い国では、衛星画像に見られる陰影の補正なしに土地被覆分類や定量的な解析を行うことはできません。陰影の補正には衛星画像と整合性のある数値標高モデルが必要であり、これら二つの画像が精密に重ね合わされていなければなりません。

本研究会ではこのような認識のもと、衛星画像の幾何的な精度の評価方法や精密幾何補正の方法の標準化ついて、年2～3回の会議およびメーリングリストを通して検討を行ってきました。メーリングリストで最近話題となったのは新聞でも取り上げられた PRISM の精度です。

研究会としては、最近の衛星画像の幾何的な精度は非常に高いため、システム情報を用いた幾何補正（オルソ補正も不可欠）により絶対精度で数画素程度、相対精度で1画素程度が実現できるようになったと考えています。従来のように多くの地上基準点（GCP）をとる必要がなくなったということです。昨年と今年の学術講演会ポスター展示でオルソ補正の方法や幾何的精度の評価方法などを紹介しました。ホームページにも掲載しておりますので是非ご覧下さい。

<http://gosei.mech.hirosaki-u.ac.jp/~rssj/>

これからは、放射量補正や土地被覆分類についても手法の標準化や画像の評価の方法を検討していきたいと考えています。具体的な検討事項としては、デジタルカウント値から放射輝度値への変換（校正）、放射伝達モデルによる大気パラメータの計算なども含まれるかと考えています。

3. 連絡先

沖 一雄

東京大学 大学院農学生命科学研究科

生物・環境工学専攻 生物環境情報工学研究室

E-mail: agrioki@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

Tel. 03-5841-5341 (ダイヤルイン)

Fax. 03-5841-8175